



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円

道標



体験発表で信仰の喜びを実感!

薩来園での北薩カトリック大会

北薩地区の信者の研修と交流を目的にした「カトリック北薩大会」が五月二十日(日)、薩摩川内市入来町の知的障害者更生施設「薩来園」で開かれた。大会にはレデンプトール会が担当する出水、阿久根、川内、入来、大口の五つの小教区から百五十人の信者が集まり、体験発表で大会のテーマ「信仰への感謝」を分かち合い、また石田望神父(出水)による講話「信仰の年」で信者のあるべき姿を学習した。そして締めくくりに司教ミサでは十四人が堅信の秘跡を受けるなど、喜びと感謝に満ちた大会となった。

大会は午後一時からの体験発表で始められた。発表したのは、各教会からの代表者六人(大口教会は二人が発表)。大口明光学園生二人も含まれるなど年齢も社会的立場も違う発表者たちは、それぞれに置かれた環境の中で人とのつながり

から、また自分の心の成長過程から、親との、司祭とのふれ合いなどから、紆余曲折はあったもののキリストから見放されなかった感謝の心を素直に発表した。それぞれの発表には、神からのメッセージと思われる美しい言葉が数多く鏤められ、出席者たちは時に涙し、時に笑いを誘われるなどし、発表者の素直な生き方に拍手を送った。

2012年度 カトリック北薩大会

テーマ: 信仰への感謝



大口教会代表として発表するの明光学園の二人

体験発表後には石田望神父による講話があった。この秋から始まる「信仰の年」を前に石田神父は、「典札と秘跡を中心とした生活をしよう」と促し、祈りの大切さや信仰告白の大切さを熱心に説いた。

た。大会の最後には郡山司教司式のミサがささげられ、ミサの中で十四人(出水三人、阿久根一人、川内九人、入来一人)が受堅の恵みに浴した。

教区正常化献金に心から感謝 経済問題評議会

の、特に二〇一二年年度予算案については「これからの課題」と合わせて長い話し

五月十三日(日)午後二時から教区本部で教区経済問題評議会が開催され、二〇一一年度教区会計収支計算書、二〇一二年年度教区会計収支予算書、並びにこれからの課題について審議がなされた。

鹿兒島きぼうの電話カウンセリング講座スケジュール

回	月	日	曜	講師	内容
*	6	9	土	事務局	説明会 14時・19時の2回
第1回	6	15	金	竹山昭神父	共に歩むために(Ⅰ)
第2回	6	22	金	大坪治彦先生	カウンセリングの基礎知識(Ⅰ)
第3回	6	29	金	大坪治彦先生	カウンセリングの基礎知識(Ⅱ)
第4回	7	6	金	有倉巴幸先生	職場の人間関係
第5回	7	13	金	有倉巴幸先生	人間関係の中のストレス
第6回	7	23	月	森口進先生	アルコール依存症 その関わり① [公開]
第7回	7	30	月	森口進先生	アルコール依存症 その関わり② [公開]
*	8	3	金	事務局	懇親会①
第8回	8	31	金	事務局	電話カウンセリングの実際(Ⅰ)
第9回	9	7	金	今林俊一先生	家族の人間関係
第10回	9	14	金	今林俊一先生	青少年の心理(Ⅰ)
第11回	9	21	金	今林俊一先生	青少年の心理(Ⅱ)
第12回	9	29	土	郡山健次郎司教	それでも「きぼうの電話」
第13回	9	30	日	事務局	電話カウンセリングの実際(Ⅱ)
第14回	10	5	金	大坪治彦先生	よい聴き手となるために(Ⅰ)
第15回	10	12	金	大坪治彦先生	よい聴き手となるために(Ⅱ)
第16回	10	19	金	大坪治彦先生	よい聴き手となるために(Ⅲ)
第17回	10	26	金	大坪治彦先生	よい聴き手となるために(Ⅳ)
第18回	11	2	金	事務局	電話カウンセリングの実際(Ⅲ)
第19回	11	9	金	竹山昭神父	共に歩むために(Ⅱ)
第20回	11	16	金	竹山昭神父	共に歩むために(Ⅲ) / 認定式
*	11	30	金	事務局	懇親会②
*	12	7	金	事務局	相談員オリエンテーション

新風

昨年四月二十七日、九十歳で亡くなった父の人生を振り返ると、娘を先に見送るなど幾つかの大きな試練に出会い、それら

とどまること

椅子の生活を送る母を父は七年間自宅で介護した。その間一人は、私の目にはとても幸せそうに見えていた。父が初めて「もう限界」と言ったとき、父の肝臓は悲鳴をあげていた。だから母は寂しそうだっただけが介護施設に入ったとき、周囲は少しだけ安堵した。しかし、父の病状は確実に悪化していた。弟が父を引き取り世話をしてくれているとき、父に「一番好きな聖書の言葉を色紙に書いて」とお願いした。その父が選んだ聖句はヨハネの福音だった。

「父が私を愛されたように、私もあなた方を愛してきた。わたしの愛に留まりなさい。」(ヨハネ十五の9) そして、もうひとつ。 「私のうちに留まっていなさい。そうすれば、わたしもあなた方のうちに留まることができる。」(ヨハネ十五の4)

いづれも、あのぶどうの木のとえ話からのものであった。小さいころ我が家にはぶどうの木があった。父はよく「我が家の収穫」と言って食べさせてくれた。そういう思い出のせいかわ定かではないが、私に残したくれた最大の贈り物、それが、キリストにいたった最大のもの、キリストの愛に留まること、教えること、(教区本部 寝占教之)

カウンセリング講座開講 鹿兒島きぼうの電話

人間関係を円滑にするために不可欠なノウハウを教える「カウンセリング講座」が今年も六月から、鹿兒島きぼうの電話(山口弘子委員長)主催で教区本部を会場に開かれる。

同講座は弱者に対する教区の耳となることを目的に開設された「鹿兒島きぼうの電話」で、電話を受ける相談員養成のために始められたもので今回が二十四

回目。原則的に金曜日午後七時から教区本部で開催され、二十歳以上なら誰でも受講できる。受講料は全二十回で九千円(学生は四千五百円)。「カウンセリング講座」修了者は相談員の認定を受けることもできる。

きぼうの電話は開設以来、「毎日、二十四時間体制で話を聞けるようにしたい」としてきたが、まだその夢は実現していない。現在は信者ではない協力者を含めて五十人ほどの相談員が、やり場のない苦しみの解決策を求めてかけてくる電話相談に、週五日(月、金)九時〜十六時と二十時〜二十三時の間、耳を傾けている。きぼうの電話では「今後の活動の拡充のためにも一人でも多くの人に受講してもらい、相談員になって苦しむ人に寄り添って欲しい」としている。

受講希望者は山口弘子委員長(TEL〇九〇一六一二一七三七二)か辻聡事務局長(TEL〇九〇一五四八八一九六八〇)まで。

キリシタンの歴史(五)

―女性とキリシタン―

溝辺教会主任司祭 坂本 進

1 女性の権利憲章とサッチャー元首相の生き方

一九七〇年代、アメリカにおいては、女性の地位向上を目指す運動が盛んになつていました。この時に出版された本に『さわやかな女に』(一九七七年)という本があります。そこには、全女性の権利憲章というものが提示されています。それは、女性には、次のような権利がもともと備えられており、その源流はキリスト教の「神の前における平等」の考え方にある、というものでした。すなわち、女性には、①尊敬をもって扱われる権利 ②自分の感情と意見を持ち、それを表明する権利 ③人に自説に耳を傾けてもらい、まじめに取り上げてもらう権利 ④自分にとって大切なものはつきりさせる権利

⑤申し訳ないと思わずに「ノー」と言う権利 ⑥自分の欲するものを要求する権利 ⑦自分が支払ったものを得る権利 ⑧専門家から情報を得る権利 ⑨失敗する権利 ⑩自分の意見を主張しないでいる権利があると言われました。

二〇一二年現在、日本には、政府の諮問委員会として「内閣府男女共同参画会議」という機関が組織され、女性の地位は著しい向上をえています。

「鉄の女」と言われたサッチャー英国元首相は、少女時代から「自分で考え、自分で行動し、自分でその結果に責任を取る」というキリスト教信仰に基づく自立の生き方を身につけ、首相時代にも、その生き方を貫き通しました。「民主主義とは、量的に同等に皆の意見を聞くというだけでは

なく、質的な差異を区別し、真理に基礎づけられたリーダーシップを持つ者によつて導かれていくということでもある」と言っています。

そして、そのリーダーシップを担う者は、女であるか男であるか、白人であるか黄色人であるかを、問いません。サッチャーは女性首相としてということではなく、首相として選ばれ、任務を遂行することに召し出しを受けたのです。女性も男性も対等に尊重され、権利が認められ、責任を負っていく自立の生き方へと召されている、ということなのです。

2 有馬晴信夫人ジュスタの生き方

二千年前のイエスの時代に、キリスト教に入信した多くの女性たちは、男性

に従属することなく、人間として男性と対等に生きることができると女性の捉え方を、キリスト教の中に見い出していったのです。キリスト教の教えの中に、女性解放のメッセージ(福音の使信)があった、ということでしょう。

日本の戦国時代・キリシタンの世紀の時代に、キリスト教に入信した武士の妻と娘たちの多くも、イエスの時代と同じように、男や家・主君に従属するのではない人間としての尊厳を、キリスト教の中に見い出したのです。

戦国時代の大名・武士の妻女として、よく知られているキリシタン女性としては、薩摩藩十九代藩主となった島津光久の実祖母、キリシタン大名小西行長のもとから島津一族に嫁いできたカタリナ永俊尼(一五七五～一六四九)が挙げられます。キリシタン禁教令が出されていたにもかかわらずカタリナは棄教せず宣教活動を続け、種子島に流刑されました。「自分で考え自分で行動し自

生きる 人生に不安はつきもの 終身助祭 川口 茂

長い人生の間には、悩みや苦しみなど色々な困難に襲われます。そんな私たちは、はつきりとは意識してはいないかもしれませんが、心の片隅で「自分はこれで大丈夫だろうか」「間違っていないだろうか」「これが自分の人生のすべてなのだろうか」などと思ってしまう。こういう不安という感情は、穏やかな毎日を脅かすもので、人間を縛り苦しめるものでもあります。

人間に不安はつきものですが、でもそういった困難の出現は、たとえどんなことがあろうともイエスさまを自分の心の中に迎え入れて、お祈りのうちに相談する

集い等のお知らせ

- ノベナ集い 6月18日(月)19時～ レデンプトール宣教修道女会(鹿兒島市唐湊2-10-2 TEL 099-253-6658)
- 新・救いと聖書の読み方講座 6月18日(月)10時 坂本進神父「ヨブ記と苦しみの意味」ザビエル教会集会室 500円(受講料)
- ホリスティック・スピリチュアルケア講座 6月19日(火)18時30分 坂本進神父「ヨブ記と苦しみの意味―ケセン語で学ぶ」ザビエル教会集会室 500円(受講料)
- 祈りの集い 6月30日(土)10時～16時 レデンプトール宣教修道女会(鹿兒島市唐湊2-10-2 TEL 099-253-6658)費用:昼食代(実費) ※弁当持参可、ミサあり。申込締切:6月27日(水)

分でその責任を取る」サッチャーの自立の生き方を生かして見せたと言えましょう。同じ小西一族の養女・韓国籍を持つおたあジュリアも、神津島に流刑されながら、迫害に屈することなく信仰を貫き、自立の生き方を生きて見せました(カタリナ永俊尼、おたあジュリアについては、『鹿兒島教区報』二〇一〇年十一月、十二月号、二〇一一年三、四、五、六、七月号において、詳述してあります)。

キリシタン大名・有馬晴信の妻ジュスタも、また、自立の生き方を貫いた女性として知られています。晴信は、旧領を取り戻す野心を持って、天下人であった徳川家康

という霊的生活を送るためのチャンスでもあるのです。そんな気づきがあったとき、鹿兒島教区の信者のモットーとも言える「:それでも喜び・希望・感謝」という生き方にチャレンジできるように思っています。

この宇宙をつくり、私たちとともに今もいつまでもどこでもおられる神を信じ、神の愛、神の慈しみの中で育まれながら、「主イエス・キリストのみことば」を信じて生きることができれば最高です。

そこには何もものにも束縛されないうで、私たちが惑わすあらゆるものから解放されて生きていく知恵がありますから、どうぞ「神の思召しがおありならば」とお委ねすることもできます。私はこれこそが宝の畑を手にかけている人の生き方だと思っています。

にその執り成しを頼みまいない(賄賂)を贈ったことから汚職疑獄の罪に問われ、他の罪状も発覚させられ、死罪となつてしまいました。晴信は死(切腹)が執行されるまで流刑地に配流されていましたが、その地にあつて回心し、良書を読み、救い主イエスの死を瞑想する日々を送つた、と言われています。聖女と言われた妻のジュスタは、晴信と共に流刑地に赴き、夫の心労を慰め、信仰教話を夫にしたのです。そして、晴信の死後、キリシタン禁教令が發布されていたにもかかわらず、宣教師たちを匿い、信仰を貫き通したのです。それは、この世への執着を断ち切り、神の国・復活への希望を揺るぎないものとさせていたからにほかなりません。デイエゴ・パチエゴ『九州キリシタン史研究』H・チースリック『キリシタン史考』によれば、刑場における晴信の最期とそれに立ち合つた妻ジュスタのことがこう記されています。

「ジュスタは、心の悲しみを顔や態度に出さず、罪の痛悔やこの場に必要なら神への祈りを夫に勧めた。彼は両手を挙げて十字架の忠告を果たしていた。彼は切腹した時、一撃で自分の首を斬り落とした。首が落ちるとジュスタが直ちにそれを手にとって、はじ

め自分の顔の前に置き、次いで体の脇に置いて奥の室に引き下がり、全身を涙で濡らし、神のみ心に叶うようにその悲しみやすべての苦しみを神に捧げ、頭髪を切つたのである」

「次号では細川ガラシャ夫人の生き方などについて触れてみたいと思います。」

から」
対象:青年男女(40歳代まで)
指導:ディアス神父(イエズス会)
参加費:14,000円
申込先:カノッサ修道会大口修道院(Tel 0995-22-6276)
Sr. マルティネス

黙想会へのお招き

7月14日(土)～16日(月)
場所:イエズス会立山修道院(長崎市立山5-8-30)
テーマ:「あなたの生き方のヒントに…みことばと26聖人の生き方

第11回日本カトリック障害者連絡協議会 30周年記念―名古屋大会―

信仰において障害を受けとめるとは 神の国はあなたがたの間にある

2012年7月14日(土)・15日(日)

愛知県産業労働センター ウィンクあいち

参加費:5,000円(15日だけの参加は2,000円)

締切:6月13日

主催:日本カトリック障害者連絡協議会30周年名古屋大会実行委員会

出席希望の方は、教区の窓口「パッションの会」までご連絡ください。

副会長 久保孝子 TEL 099 (254) 8617

事務局 徳永善博 TEL 090-3669-0423

四十七年間の感謝を込めて

クリスマス・ロア宣教修道女会とのお別れ

瀬留小教区

私たちの小教区で活動されてきたクリスマス・ロア宣教修道女会赤尾木修道院のシスター方が、六月六日(水)で修道院を閉じられ、全員島から引き揚げることにになりました。これでまた鹿兒島で働いて下さった修道会が一つ消えてしまいました。

瀬留小教区は、シスター方の会が知的障害児のために「希望の星学園」を開設されて以来、実に四十七年という期間をシスター方とともに歩きました。シスター方の働きは教会の子どもたちへの要理教育、地域の宣教活動にと多岐に渡る奉仕で、信徒に祈りの大切さを身をもって教えて下さいました。

そんなシスター方との別れを惜しんで、五月十三日(日)小教区共同体で送別会を催したところ、九十人もの出席がありました。出席者はご夫婦で、子どもたちも含めた家族で、そして地域の有志の方々で、と



挨拶する河野管区長

でも盛大な宴になりました。食事をしながらでした。集落のある方から「毎朝、犬の散歩をさせるときシスター方が教会にお祈りに来られる姿を見て感動していました」お告げの鐘の響きにシスター方が集落の平和と集落の皆さんの健康を祈って下さっているのに感動しました」とのお話があり、皆であらためてシスター方に感謝することでした。

また子どもたちからも「瀬留教会のミサに来るとシスターたちに会えて嬉しかったです。これから寂しくなります」と。信徒代表からは知的障害の子どもたちに対する献身的な働きに感謝することばが。九十歳のおじいさんは自慢の詩吟で「瀬留良いところ、イエズスさまが一番ですよ。ありがとね。またイモレヨ」と美声を披露してくれました。そして瀬留教会の主任司祭柄尾神父さまは、習い始めたばかりの島唄で「イキユンニヤカナ、シスター方、お世話になりました。これからもイエズスさまのお恵みが豊かにありますように、瀬留小教区一同、イノリヨオット！」と上手に歌われました。こんな心温

司教執務室だより

アレルヤは終わらない

「私たちは、今聖堂の中に集まって神を賛美していますが、おの自分の家に帰るとき、神を賛美するのをやめるかのようにです」(教会の祈り復活節第五金曜日第二朗読聖アウグスチヌス司教の『詩編講解』。少し皮肉めいた言葉であるが、復活節に歌われるアレルヤが「主を賛美せよ」という意味だと教える解説文の一節だ。

復活節を終え、聖霊降臨もお祝いして、典礼の季節は年間に入っているが、ミサの中からアレルヤがなくなることはない。それは、アレルヤが復活節の八回から四回に減っているとはいえ、復活節が終わっても、主を賛美し続けるのが教会であり、信者であるということをおうとしていくかのようだ。

そんなことを思いめぐらしていると、ふと、主が、ドアをノックしておられる御絵が目の前に浮かんだ。よく歌われてもいる、だれか開ける者があれば共に食



事をする(黙示録三章二十節)というくだりなのだが、聖書を開いて思わず声を上げた。「勝利を得る者をわたしは自分の座に共に座らせよう」(二十一節)と続いていることに気が付いたからだ。そして、一人納得した。主は、アレルヤを歌いながら私たちが勝利の会食をなさりたいのだ、と。すると、あの静止画が突然動画に変わり、両手を高々と上げた主が、アレルヤが歌われるパーティー会場に迎えられたのだ。

そんな賑やかなパーティーが毎日では身が持ちそうにないが、主との会食は毎日のことであり、そうでなくても、アレルヤを繰り返しながら復活の主をたたえ続けるのが信者の普段の生活ということになる。

六月はみこころの月。「一緒に勝利の会食をしたい」と、傷つきながらも、御父のみこころを全うされた主が、今日もノックされる心の扉を「アレルヤ!」と勢よく開けることができる日々であることを祈りたい。

まるひとときを過ごすことができました。参加者たちはクリスマス・ロア宣教修道女会のシスター方との絆を深めながら、イエズスさまのブドウの木にしっかりとつながつて行くことができるようにと祈りながら散会しました。

「短信」

▼ザビエル教会でコンサート

五月十一日(金) 岩永善信さんのギターコンサートがザビエル教会聖堂で開かれた。

▼谷山教会でコンサート

五月十三日(日) 鹿兒島ハイドン協会のオーケストラ・合唱団の第八回演奏会が谷山教会で開催された。

▼典礼研修会
五月二十日(日) 午後、

した。これからのシスター方のご健康と宣教活動にお祈りいたします。長い間、ありがとうございました。感謝を込めて。(瀬留小教区通信員 栄)

ザビエル書院の窓

「イエスの言葉」
ケセン語訳 山浦玄嗣著



文藝春秋
定価 (780 円+税)

6月の会と催し

- 3日(日) 三位一体の主日
- 9日(土) 宣教学校の会・教区本部・13時30分
- 10日(日) キリストの聖体
- ▼日本二十六聖人列聖感謝ミサ
- ▼ザビエル教会聖信式・9時
- ▼連合壮年会総会と懇親会(千五百円)・ザビエル教会ホール・17時
- ▼レジオマリエ鹿兒島コミチウムのアチエス・ザビエル教会・14時
- ▼奄美カトリック女性連盟総会・大笠利教会・10時
- 13日(水) 泉浩二神父霊名(聖アントニオ)
- ▼東研神父霊名
- 15日(金) イエスのみ心
- ▼年間第十一主日
- ▼典礼研修会
- 17日(日) 奄美地区宣教司牧を考える会
- 18日(月) レデンブートル会例会
- 19日(火) カスグレン神父命日(一九七九年)
- ▼奄美地区例会
- 21日(木) 奄美地区宣教司牧を考慮する会
- ▼サントス神父叙階記念(一九七四年)
- 24日(日) 洗礼者聖ヨハネの誕生
- ▼ハヌス神父、レヒナ神父、小川靖忠神父霊名
- ▼オリーブの会・教区本部・14時
- ▼聖ペトロ使徒座への献金
- 25日(月) 山口重義神父叙階記念(一九七二年)
- ▼聖ペトロ 聖パウロ使徒
- ▼「霊名 聖ペトロ」竹山昭神父、美島春雄神父、永山幸弘神父
- ▼「霊名 聖パウロ」糸永真一名司教、小隈憲士神父、坂本進神父、アン神父
- ▼ムイベルガ神父叙階記念(一九六九年)
- ▼「ノベナの祈りの意向」6月21日〜29日「郡山司教のため」

+KABAYAN SEKSIYON+ "PAGLALAHAD"

III-ANG DIYOS AY INIHAYAG BILANG AMA SA KASULATAN
B.Ang Ugnayang- "Abba" ni Jesus
Natatangi ang ugnayan ni Jesus sa Ama.Sa Matandang Tipan,ka limitang tinutukoy ang "Diyos ng ating mga ninuno."Pinaglalangan lamang ang Diyos bilang "Ama" sa labing-isang bahagi at hindi kai lanman sa tahasang pagtukoy.Ngunit malimit banggitin ni Jesus ang Diyos bilang Ama sa Bagong Tipan.Lalo itong totoo sa mga napakamahagang yugto sa buhay ng ating Panginoon-sa kanyang Binyag,sa kanyang Pagbabagong-anyo,sa kanyang Huling Hapunan sa piling ng mga Apostol,at higit sa lahat sa kanyang Pagpapaka sakit sa Kamatayan.Sa bawat maigting na sandaling ito,naranasan ni Jesus ang natatanging ugnayang ito sa Diyos,ang kanyang "Abba."Nabuhay siyang bilang Anak ng kanyang Ama sa pamamagitan ng kanyang maka-anak na pagmamahal,pagtalima at ganap na pagtatalaga ng kalooban ng kanyang Ama.Naunawaan din ni Jesus na ang karanasang ito ay natatangi sa kanya: "Walang nakakikilala sa Anak kundi ang Ama,at walang nakakikilala sa Ama sa Ama kundi ang Anak at yaong marapating pagpahayagan ng Anak"(Mt.11:27).Itinuro ni Jesus na ang Diyos ay Ama ng lahat,at tinuruan ang kanyang mga alagad na manalangin sa Diyos bilang "Ating Ama"(Mt 6:9).Sa pamamagitan nito ay binago niya ang pananaw at larawan ng Diyos.Para kay Jesus,ang Ama ay hindi isang Diyos na mahigpit at nagtuturing sa mga anak na parang musmos,kundi isang Diyos na may malasakit na di mapapantayan para sa atin,na mga anak Niyang inampon.Isinugo niya ang Matuwid,ang Immanuel,ang Diyos na sumasaatin.Siya ang isang mapagpatawad na Amang buong-galak na sumasalubong sa kanyang alibugha at nagsisising anak.Siya ay isang Ama na di-kayang suhulan,lamangan o paglinlangan sa anumang paraan.Sapagkat ang kanyang pag-ibig sa atin ay walang-hanggan.Sinugo niya pati ang kanyang bugtong na Anak upang mamatay sa Krus upang makamit nating lahat ang kaligtasan at bagong-buhay.Ang pagpapahayag sa Diyos bilang Ama o Tatay ay upang maunawaan ang papel ng Diyos sa ating sariling pagkakakilanlan.Sa kaibuturan ng ating sarili ay hina hangad nating maging mga anak na ampon Niya.Kinikilala natin ang napakalaking utang na loob natin sa Diyos na ating Ama na nagtaguyod sa atin sa bawat sandali ng ating buhay.Ngunit nauunawaan din natin ang ating pananagutang iayos ang ating buhay ayon sa mahal na kalooban Niya.Ang tanging hangad ng kanyang maka-Am ang pagmamahal ay ang ating lubos na kabutihan.Kalooban ng Diyos na tayo ay umunlad sa kaganapan ng ating mga kakayahan,tungo sa ganap na kaligayan.Kung kaya,lubos tayong totoo sa ating mga sarili,lubos tayong mapanglikha kung tumatalima tayo sa kanyang kalooban.Ang buong-pagtitiwala sa kanyang maka-Amang Kagandahang-loob ay nagpapalaya sa atin mula sa lahat ng nakalu lumong takot,sa pamamagitan ng isang wagas at positibong asal ng "bahala na."

Katekismo-Pilipinong Katoliko (Fr.Dino Orolfo)

中高生の長崎巡礼を終えて

テーマ「みことば(呼びかけ)を生きるとは」

長年続いている恒例の春の中高生巡礼が今年も三月二十六日(二十八日まで実施された。今年も少人数の参加だったが、彼らにとつてはこれまでと同じように記憶に残る素晴らしい巡礼の旅となったようだ。彼らが見て、聞いて、触って感じたことをご紹介したい。(泉 浩二)

赤木名教会 大司花月

私は、巡礼自体が初めてで、何をするのか正直全然分かりませんでした。最初は不安だったけど、男子三人が加わって、すぐにぎやかで楽しい旅になりました。

今回いろいろな所に行つて、いろいろなことを感じて、考えたりしました。二十六聖人資料館で一番びっくりしたのは、よく話題になる二十六聖人の殉教からまだそんなに時が経っていないということでした。今でこそ堂々と教会に行ったりしているけれど、もしもその殉教者たちと同じ時代に生まれていたら、信仰を貫き通せるか、自分の命をささげてまで「自分はキリスト信者です」と言えるか、正直自信はありません。でも自分たちの命をささげた多くのキリスト信者の方々、二十六聖人の方々が守り、受け継いできた信仰のバトンを受け取った私たちは、別の方法で信仰を示し、次の世代へとバトンを渡さなければなりません。では、どのようにして信仰を示すべきでしょうか？私は、まだそこまで考えを掘り下げることができませんから、取りあえず「隣人を愛せよ」を目標に、誰でも受け入れられるような器を持つ心の広い人間になり



コルベ記念館で瀧神父さまと

赤木名教会 大山真歩

たいです。そしてコルベ神父様のように、自分の払う犠牲を惜しまない人間になれるように頑張りたいと思います。

また原爆資料館は「本当に現実にあつたことなの」というぐらい、想像を絶する痛々しくて悲しいものでした。写真に写っている人の顔がどれも今にも泣き出しそうな顔なので、思わず私のほうも泣きそうになつてしまいました。もうこんなことが二度とないように、皆が平和に暮らせるために「愛」を掲げるキリスト教の教えが必要不可欠なんだと思いました。

スーさん(鈴木助祭)のやさしいみことば

平和を実現するとは？

今も昔も新聞やテレビなどで「平和」という言葉がいたるところで頻りに用いられます。また、同じくミサの中でも「平和」という言葉が何回も使われます。実は、一般に使われるこの言葉と私たちが使うものとは、同じ日本語であっても意味合いがまったく違います。「平和」はヘブライ語で「シャローム」と言います。この言葉は挨拶としても使われることからご存知の方も多いことでしょう。さて、私たち日本人は「平

和」と聞くと「何も争いのない状態」をイメージしますが、ユダヤ人たちはこの言葉を「自らが働いて勝ち取るもの」の意味合いで使います。これは古代イスラエルの歴史、即ち、旧約聖書の歴史的側面を読めば自ずと明らかになります。つまり、「平和」という言葉を静的な意味で理解する私たちと動的な意味で用いるユダヤ人たちの間には、この言葉に関して根本的な見解の相違があるのです。

マルコ福音書を紐解くと、「平和」という言葉は「互いに平和に過ごさなさい(9・50)」という一箇所だけで使われています。原文でこの箇所は「互いに平和でありなさい」と表現されています。つまり、「平和であるために、あなたがたは何らかの働きをしなければ」とイエス様は命令になつておられるのです。また、この箇所の前でイエス様は「自分自身の内に塩を持ちなさい」ともお命じになつておられます。当時、塩は友情と契約のしるしとして用いられた(民数記18・19参照)。このことを踏まえると、イエス様は

弟子たちに「共同体的一致を保ちなさい」と仰つておられるのです。では、これら二つの命令は現代では何を意味するのでしょうか。私たちが御ミサの中で何度も「平和」という言葉を唱えます。また、閉祭では司祭が「行きましよう。主の平和のうち」と唱え、「神に感謝」とこたえます。御ミサを終え、日常へと派遣されるときに、私たちは神の国の平和を実現するように促されているのです。福音を生き、それを隣人と分かち合いなさい、とイエス様から命じられておられるのです。

コルベ記念館は、コルベ神父のゆかりの場所です。コルベ神父は肺を半分失つていた人で、他人を生かすために自分のいのちを差し出した人です。さらに十七日間、飲まず食わずで、意識を保つという奇跡を起こした聖人です。記念館を見ただけでも、すばらしい人格の人間だと思えました。大浦天主堂は、反キリスト教的な政治による迫害から身を隠し、長い間信仰を守り抜いた人たちと神父の出会いの歴史ある場所

す。孤立しながらも信仰を守り続けたことが、信徒発見を引き寄せたのだと思います。浦上天主堂は、とても大きな教会でした。多くの信者がおられ、大きい上にとっても美しい場所でした。平和公園・原爆資料館では、長崎が受けた原爆による被害を知ることができました。展示されていくものはとても痛々しく、原爆の悲しみを教えてくれました。もしも自分がもう少し早く生まれていたら、長崎に生まれていたら、自分の身だけが被害を受けていたかもしれません。原爆の被害は、すべての日本人が知る義務がありま

文芸

俳句

芸

短歌

- 鹿兒島純心 山頭 信子
- 霧島市 政 ノブ子
- 愛光園 春山マリ子
- 出水市 沖 弘子
- 鹿兒島純心 川上 和
- 復活祭司教さわやか主の平和
- げんげ田の続く道行く朝のミサ
- 花摘みて春の野を行く一人道
- ミサを待つ乙女峠は新樹雨
- 鶯や去年のごとく今一度
- 紙人形私を作った自慢作飾つて眺めて嬉しい気分
- 慕参り女房泣くか忍ぶ雨我濡れたしや寒さこらえて
- 春彼岸に霊も帰るといふからに亡妹と聞くと聖書講座のテープ
- さつき晴れしやちほこ誇る大空に緋鯉はためき小鯉ものぼる
- 愛光園 春山マリ子
- 奄美市 林 常広
- 鴨池教会 前田 儀子
- 鹿兒島純心 川上 和

ザビエル教会 川上将人

「みことばを生きるとは」というテーマを胸に長崎の地に立つて二日目。初日のアクシデントにより予定がずれて、少しハードな一日になった。「二十六聖人記念館」「コルベ館」「大浦天主堂」「浦上天主堂」「平和公園」「原爆資料館」に行つた。

平和公園・原爆資料館では、長崎が受けた原爆による被害を知ることができました。展示されていくものはとても痛々しく、原爆の悲しみを教えてくれました。もしも自分がもう少し早く生まれていたら、長崎に生まれていたら、自分の身だけが被害を受けていたかもしれません。原爆の被害は、すべての日本人が知る義務がありま